

果 樹

1 共通（りんご、ぶどう、もも、なし等）

果樹園はSSや乗用草刈機等を使う機会が多いため、土が硬くなっています。有機質を施用する等、土壌の物理性改善に努めましょう。なお、雑草による草生栽培を導入している方も多いですが、雑草由来の“有機質”だけでは不十分です。積極的に優良な有機質を施用しましょう。

また、土壌の肥料成分バランスを整えるためには、定期的に土壌診断を実施し、適正な施肥を行うことが重要です。2年に1回は土壌診断を実施して状況を確認しましょう。

近年の土壌診断結果から、全体的にカリとリン酸が過剰な傾向がうかがえます。ぶどうの苦土欠乏症(写真1)は、苦土不足以外に、カリ過剰によっても発生します。若木で樹勢が強い場合にも発生することがありますが、適樹勢樹での発生は肥料成分のバランスが崩れている可能性が高いので、注意しましょう。



写真1 ぶどうの苦土欠乏症

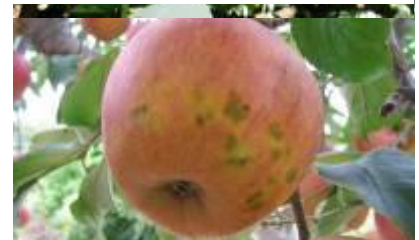


写真2 「ふじ」のビターピット

(1) 基肥の施用

収穫終了後～落葉期頃に基肥を施用します。

施肥量については「毎年これ位施肥していたから」という感度でなく、「土壌診断の結果」や「果実の品質（着色や肥大）の良否」、「適樹勢であるかどうか」に基づき、総合的に判断して適正量を施用してください。

特に、窒素過多になると、りんごではビターピット・コルクスポット(写真2)、ぶどうでは着色不良(赤熟れ)等弊害が生じる場合があります。地球温暖化により土の中に蓄えられていた窒素成分が発現する期間が長くなっていると指摘されていますので、むやみな窒素成分の施用はやめましょう。

若木や強樹勢樹では樹勢が落ち着くまで施肥は控えますが、ぶどうは、極端に施肥を控えすぎると弱樹勢となり、果実肥大が劣る場合があります。樹勢を観察するとともに、土壌診断を実施し、適正な施肥に努めましょう。

(2) 来年へ向けた病害対策

病気の防除には農薬による防除だけでなく、耕種的な防除により菌密度を下げるのが重要です。

りんご黒星病や褐斑病は落葉上で越冬しているため、これが最初の伝染源になるため、落葉処理(土中埋没或いは焼却)が有効です。本年は黒星病の発生が多くなりました。発生が多かった園地では落葉処理も検討してください。ぶどうべと病は葉、黒とう病・晩腐病は、巻ひげや穂軸で越冬し、春先の雨等により伝染します。そのため、黒とう病・晩腐病に関しては、夏季管理～冬季剪定の期間中に巻ひげや穂軸を除去することが効果的な対策になります。本年もシャインマスカット、クイーンルージュ®を中心に黒とう病の発生が多い年となりました。発生の多かった園地では巻きひげや穂軸の除去を行ってください。べと病菌は地中で2年以上生存するため、降雪前に葉をすべて拾うことも有効な対策となります。

2 りんご

(1) 「ふじ」の収穫

収穫にあたっては、果実品質を確かめ、適熟果から数回に分けて収穫しましょう。着色系は、未熟果を収穫しないようにしてください。特に選果にあたっては青み果の混入が見られますので、注意しましょう。

また冬が近づくとつれ、気温が低下し、果実が凍結する危険があります。凍結果実は日持ち性が劣るので、天気予報を参考に計画的に収穫作業を行い、最低気温が氷点下となる前頃を目安に収穫を終わらせましょう。万一、果実が凍結した場合は、気温が上昇し果実が解凍したのを確認してから収穫してください。

「ふじ」の収穫期の目安

満開後日数	185～200日
糖 度	15～16%
硬 度	13～14ポンド
地 色	黄緑～黄